

幼稚園の教育課程はどのようにとらえられているか

——インタビューを通して——

山崎 晃 鳥光美緒子 七木田 敦
石田 裕子 中坪 史典 縫部 義憲
米神 博子 林 よし恵 道下 真穂
松本 信吾

平成12年4月に新しい幼稚園教育要領が施行された。また、保育所保育指針も時を同じくして、平成12年4月から新しくなった。このような幼児教育や保育の根幹に関わる変更はおおよそ10年の間隔をもって行われている。本研究はそのような幼稚園教育に大きな変化をもたらす教育要領の変更に伴うであろう教育課程の編成に当たっての様々な問題点を明らかにしようとするものである。特に本稿では、当事者である幼稚園教師に対する直接のインタビューを通して、教育課程をどのようにとらえているか、教育課程の編成するにあたってどのような問題点があり、どのようにそれを克服し、日常の保育に生かしているかについて明らかにしようとするものである。

一般的に、それぞれの幼稚園にはそれぞれ異なった教育課程がある。ここでは、幼稚園における教育課程を保育の中で展開される幼児と保育者との相互作用を規定する基本的な役割を果たすものとしてとらえ、教育課程編成の視点、および教育課程編成の手順について考えてみることにする。本年度は、特に編成の視点について、教育課程編成の歴史、現在の教育課程のとらえ、教育課程編成に当たっての留意点などについての内容に限定して述べ、来年度以降その他の側面について述べる予定である。

そもそも教育課程とは、学校教育法、学校教育法施行規則に基づいて幼稚園教育要領に規定されているものである。幼稚園教育要領第1章総則第3項に次のように述べられている。

「各幼稚園においては、法令およびこの幼稚園教育要領の示すところに従い、創意工夫を生かし、幼児の心身の発達と幼稚園および地域の実態に即応した教育課程を編成するものとする。

(1) 幼稚園生活の全体を通して第2章に示すねらいが

総合的に達成されるよう、教育期間や幼児の生活経験や発達の過程などを考慮して具体的なねらいと内容を組織しなければならないこと。この場合においては、特に、自我が芽生え、他者の存在を意識し、自己を抑制しようとする気持ちが生まれる幼児期の発達の特性を踏まえ、入園から修了に至るまでの長期的な視野を持って充実した生活が展開できるように配慮しなければならないこと。

(2) 幼稚園の毎学年の教育週数は、特別の事情のある場合を除き、39週を下回ってはならないこと。

(3) 幼稚園の1日の教育時間は、4時間を標準とすること。ただし幼児の心身の発達の程度や季節などに適切に配慮すること。」

教育課程編成の視点 このような教育要領を基礎として、各幼稚園においては、それぞれの幼稚園独自の教育課程を作成することになる。しかし、教育課程を編成するに当たっては、幼稚園教育要領だけがその基礎となるわけではないことはいうまでもない。

教育課程を作成するためにはいくつかの条件あるいは要因とも言えるものがあるだろう。そのことについて、ここでいくつかの幼稚園で実際に教育課程を編成するために行われたものを挙げる。広島大学附属幼稚園では、①幼稚園教育要領は、学校教育法、学校教育法施行規則にも規定されている通り幼稚園の教育課程の基準である。教育課程の編成にあたっては、幼稚園教育要領に述べられていることを基として、幼児期にふさわしい教育の展開を目指す幼稚園教育のあり方を理解し、幼児の心身の発達や幼稚園、地域の実情に即した教育課程を編成することが大切である。

②教育課程とは、幼児の発達の過程を見通して、幼稚園の教育期間の全体にわたって、それぞれの幼稚園の

Akira Yamazaki, Mioko Torimitsu, Atsushi Nanakida, Yuuko Ishida, Fuminori Nakatsubo, Yoshinori Nuibe, Hiroko Komekami, Yoshie Hayashi, Maho Michishita, and Shingo Matsumoto: What the Teachers in Kindergarten Think about the Curriculum

教育目標やめざす幼児像に向かって、どのような道筋をたどって保育を進めていくかを明らかにした全体的、基本的計画であり、入園から修了に至るまでの幼児の発達やおおまかな生活の道筋を示したものである。

③指導計画とは、教育課程に基づいて作成されるものであり、幼児の発達の実情や幼児の生活する姿と照らし合わせて、それぞれの発達の時期にふさわしい生活が展開されるように、また、一人一人の幼児が生活を通して必要な体験が得られるようにするための具体的かつ実践的な計画である。

④教育課程は具体的な指導計画と密接な関係があり、指導計画を立案する際の骨格となるものである。教育課程は、どの時期に、どのようなねらいを目指して、どのような指導を行ったらいかがが全体的に明らかになるように、具体的な目標としての「ねらい」と、そのねらいを達成するために経験させたい「内容」を組織したものである。それに対し、指導計画は幼児の実態をもとに、幼児の生活する姿を実際に思い描きながら、教育課程に沿って、さらに具体的に、それぞれの時期のねらいや内容、環境の構成、活動の予想、保育者の援助などを示した実際の・実践的な保育の計画であり、子どもたちが「いつ」「何を」「何のために」「どこで」「どのように」経験したらよいかという保育者の見通しであるといえる。

⑤指導計画には、長期的な見通しをもった年、期、月などの計画と、それと関連して具体的な幼児の生活に即した週、日などの計画が考えられる。教育課程に沿って長期の指導計画が作成され、長期の見通しをふまえた上で、週や日の計画が立てられ、日々の保育が実践されていくことになる。さらに、日々の実践のまとめから、次週のねらい、内容、活動の予想が生み出され、その積み重ねが、長期のねらいや内容に生かされていくといえる。

⑥具体的な指導は幼児の生活に応じて柔軟に行われるべきものであり、指導計画は実施していく段階で幼児の実態に沿って見直され、必要に応じて修正され改善される。したがって、指導計画の骨格である教育課程もまた、見直され改善されていく。教育課程は、編成→実施→評価→改善→実施という過程をたどりながら幼児の実態に沿って見直されていくものである。

⑦幼児教育は幼児期に完成を求めるものではなく、一生の基礎を培うものであるので、教育課程及び指導計画においては結果を求めかたちの幼児像は避けるべきである（広島大学附属幼稚園，1996）。

また、同園では、次の事項も考慮している。

- ①学校教育法・幼稚園教育要領の示す基本に従う。
- ②本園教育目標に向かい、幼児が心身共に健康で、い

きいきと豊かに育つ幼児教育の実現を目指す。

③教育方針と経営方針とを明確に整理し、それらが十分機能し実現するような工夫を図る。

④教育学部附属幼稚園として、研究を推進する、教育実習生を受け入れるという役割を十分果たせる基盤の確立を図る。

⑤学校教育のスタートに位置付いている幼稚園教育の重要性を考え、小学校教育へ何を発信し、どのように接続していけばよいかを見極め、教育課程の中にそれを踏まえていく。

⑥地方都市における大学附属幼稚園として、幼児教育にかかわる考え方や実践の提案、さらに情報の発信ができるようにする。そのために、必要に応じて関係保育施設をはじめ、関係諸機関・関係者との連携を深める。

⑦幼児期の教育の重要性を考え、それを支えている家庭・地域との連携を深めていくための工夫を図る（群馬大附属幼稚園，2000 a, b）。

さらに、公立幼稚園においては、まず、教育課程をどのようにとらえるかを次のように定義していた。すなわち、「教育課程とは、幼稚園教育の目標を有効に達成するための教育内容を、幼児の心身の発達と、幼稚園及び地域の実態に応じ、組織、配列した教育計画である。また同時に、幼稚園における教育期間の全体を見通した計画であり、指導計画を作成する際の骨格となるものである。」（真亀幼稚園 研究集録 生き生きと遊び共にのびる子どもの育成—教師の言葉かけを中心に—，1995）。教育課程の編成にあたっては、次の点が留意されている。①幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにする。

②遊びを通しての総合的な指導を行うようにする。

③幼児一人一人の特性に応じ発達の課題に即した指導を行うようにする。

このように、幼稚園において共通にとらえられている事柄としては、基本となる教育要領や関連する規定・法令を基にして、教育目標に関わった側面に注目して、さらに地域などの特性を考慮しながら教育課程を編成するという点で重要な役割がとらえられている。それぞれの幼稚園の置かれた立場の違いも教育課程を作成するためには考慮されている。

教育課程編成の手順 教育課程を考えるに当たっては、それを編成していく手順についても、どのような形にとらえられているかを考える必要がある。いくつかの幼稚園で実際に行われた教育課程の編成については、具体的にみとみると以下のようなものであった（図1参照）。

広島大学附属幼稚園（広島大学附属幼稚園，1996）

の場合

- ① 幼児の育ちの過程を系統的に捉え直す。すなわち、平成6年度第16巻紀要で捉えた、「期にみられる子どもの姿」を見直し、育ちの過程を系統的に捉える。
- ② 期の特徴的な姿と期の過ごし方を再考する。育ちの過程を明確化するために、①で捉え直した姿、及びその期にみられる特徴的な姿を明らかにし、以前に捉えた「期の過ごし方」を再考する。
- ③ 幼児の自己実現の視点を明らかにする本園独自の教育課程を編成するために、研究主題である幼児の自己実現に視点をあて、各期における幼児の自己実現の姿を明らかにする。
- ④ ねらいと内容を明らかにする(2X3)をもとにして、各期のねらいを明らかにする
- ⑤ 保育者の援助を考える(4)で捉えたねらいをもとにして、各期の保育者の援助を考える。
- ⑥ 教育課程を編成する。

群馬大学附属幼稚園(群馬大学附属幼稚園, 2000b)の場合

- ① 編成に必要な基礎的な事柄について整理をする。
- ② 教育目標についての吟味と共通理解を図る。
- ③ 幼児の発達の過程の見直しをもつ。
- ④ 具体的なねらいと内容を組織する。
- ⑤ 環境の構成についての考え方を明らかにする。
- ⑥ 行事についての考え方を明らかにする。
- ⑦ 家庭・保護者との連携についての考え方を明らかにする。
- ⑧ 小学校との連携についての考え方を明らかにする。
- ⑨ 教育課程を編成する。

このように教育課程について考えるに当たっては、

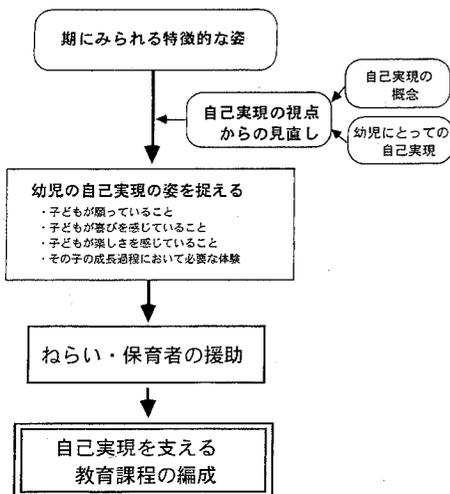


図1 教育課程編成の実際

教育課程の編成の条件あるいは要因、その手順などを考慮する必要がある。

ところで、実際に保育に当たっている教師は、自らの幼稚園の教育課程をどのようにとらえているのだろうか。日常保育の中で、教育課程がどのように意識され、それがどのように利用され、あるいは考慮され、指導計画につながっているのだろうか。小学校などとは異なり、遊びを中心とした幼児の場合には、幼児が自ら取り組むよう活動を援助しなければならないと小川(1989)も指摘しているように、幼稚園はそれぞれ独自の教育課程・指導計画を立て、それに基づいた教育が行われるべきであろう。また、教育課程の編成に関わらなかった幼稚園に移動することもある。すなわち、ある幼稚園から別の幼稚園に移動したときにはすでに教育課程が編成してあり、その成立を十分に認識しないまま指導計画におろすことが必然とされるということもあるかもしれない。そのような場合には、教師はどのように教育課程をとらえ直し、どのように利用し、活用しているのだろうか。また、それぞれの幼稚園の持つ地域の特性や文化などをどのように吸収し、日常保育に生かしていくのだろうか。本研究においては、教師に対するインタビューを通して、教育課程がどのようにとらえられ、どのように意識され、どのように利用されているか、また、そのとらえ方は教師によってどのように異なるのか、または同じなのか、さらに、意見の相違や一致をどう生かしていけばいいのかについて、考えていくための基礎的資料を提供しようとするものである。

方法

対象者：広島大学附属幼稚園の教師4名

インタビュアー：広島大学教育学部教育

インタビュー時期：平成12年7月31日、8月24日、12月22日の3回

インタビューでの質問の要旨：インタビューの際の基本的姿勢としては、それぞれの教師の考えをできるだけストレートに聞き出すように心がけた。具体的質問項目は、①教育課程編成の基礎とは何か、②実際に今ある教育課程をどれくらい利用しているか、③教育課程の見直しについてはどう考えているか、④どのような子ども観・人間観を持っているか、⑤どのような保育観をもっているか、⑥保育者の役割をどのようにとらえているか、などの視点を持って臨んだ。特に本稿では、幼稚園の教師が教育課程をどのようにとらえているか、教育課程の編成するにあたってどのような問題点があり、どのようにそれを克服し、日常の保育における教育課程の持つ意味に関して、当事者である

幼稚園教師に対する直接のインタビューを通して明らかにしようとする目的で行った。しかし、実際のインタビューにおいては、すべての教師に全く同じ質問をしても、インタビュアーとのやりとりの中でその返答のし方が異なることも多かったので、完全に同じ内容を聞き取っているともいえない部分がある。インタビュー内容はすべて録音し、そのテープを起こした。

本研究においては、以上のインタビューのうち①の教育課程の編成の基礎について、特に、教育課程をどのようにとらえどどのような要因を考えて編成すべきかについて焦点を当てることとした。

結果と考察ではIはインタビュアー、A、B、C、Dは幼稚園教諭である。

結果と考察

教育課程編成の視点

教育課程の編成の歴史について平成8年に3歳児から5歳児までの教育課程が編成されたが、それ以前に教育課程が編成され明文化されていたかについて次のような内容があった。

I この幼稚園には以前（平成8年以前）に、はっきりと明文化された教育課程があったのですか。

B 平成8年から3歳児から5歳児までのすべての年齢に対応したものを作るといような方向で進んできたのですが、この幼稚園に私がきたのは3歳児学級が増設されたときですので、それまでの教育課程の編成やそのことについての話し合いには関わっておりませんので、十分にそのことについては理解しておりません。

（なお、この点について、後日、次のような事情であったことが判明した。『平成8年度に編成された現行の教育課程以前にも、教育課程は存在したが、それは紀要に掲載された形では示されていなかった。平成5年に3歳児学級が開設されたのに伴い、それまでの2年課程の教育課程とは別に、3年間を見通した教育課程の編成が必要となったことから、平成5年から3年間かけて子どもの発達の道筋を探り、それを基にして3年課程の新しい教育課程編成に取り組み、紀要に載せた。』）

このような認識に対して、別の教師は全く違った認識をしていた。その点について、インタビューの内容を掲載する。

K いいえ、ありました。教育課程に縛られてそれに引っ張られるようだったら教育課程は必要がないとをいうことだったけれども、私たちはそれが入りますとをいうことで作っていました。

I いまのような形であったんですか。

A こういう形ではないんですが、ありましたよ。ずっとあります。次の指導計画というのはそれぞれが自分で作ったんです。なしでやったことはないです。それは必ず作っ

ていましたよ自分で。教育課程の1枚ものは4歳5歳についてはあります。他の先生たちと一緒に作りました。期のところに月が上に入っていました。期は入っていませんでした。

このように同じ幼稚園の構成員であっても、あるいはそこに関係したものであっても認識のし方が異なるものであった。この違いはどこからくるのであろうか。第1には、歴史を十分に知っているかどうかという問題であり、第2には、そのことを関係者が共通認識していなかったこと、第3番目には、現在のスタッフのほとんどが、最近着任したことによる可能性がある。いうまでもなく、歴史を知ることには次の歴史を作る上で欠くことのできないものである。どのような歴史があって現在の教育課程があるかについて、構成員が十分に認識することこそ大切なことではないだろうか。

現在の教育課程をどのようにとらえているか現在の附属幼稚園で編成されている教育課程について、前の幼稚園と比較しながら、次のようにとらえていた。

C 前の幼稚園にもありました。作るところや実際に関わっていないのであるものとし、それを見直すというのは必要な気がするんですけどそれを土台に直すぐらいで、自分が教育課程を作るときにはあまり関わっていない。必要なものとして、あるものとして考えています。日々の生活をしながらも時々今の時期の子どもの姿はこれでいいのかと確認するために見るということをしします。実際には、広いので、おおまかに書いてあるのでどういうふうにもでもとらえられるかなというふうに思いますし、あまりこだわっていません。実際に、広いのでかなりおおまかですよね（大きく期にくくってあります）。ですから、どういうふうにもとらえることができるもので、あまりこだわって、ぎちぎちに縛るものとしては考えていません。

I 子どもが育ってゆく過程が先生方の頭の中にはあると思うんですが。

C それがちゃんと、それをどういうふうに書いて出して言われたとしたら、それは難しいと思います。しかし、日々の生活していく中で、起こってくることについての考え道筋は自分の中にあると思いますが、それを書いて出すとなると自分の中で不安なところがあります。

I 自分の思っていることと教育課程に書いてることを対照するというのも、或いは確認するというのもあるかもしれませんね。

C そうですね。それはあります。

D でも、それは理論化してあるのではなくてなにか感じられるものとか、一緒にいることによって、子どもがそうなるくるし、子どもに望むというか、そうなってほしいということとはよくあると思います。そのような感じというとなれば、教育課程はいらなと思います。一人ひとりに

そういう関係があれば、なくてもいいと思います。

前の幼稚園は教育課程、こういうのはないです。ですが、週案や日案は決まっている。だからあることは全部決まっているガチガチに。教育課程、そういう見通しようなものは多分ない。

ここの教育課程は、ごく当たり前のことしか書いてないし、何もいではないかと思いました。その意味で非常に自由になったような気がして、子どもと向き合うような感じがたのかなと自分で思っています。でも、子どもによって期がどうのこうのいっても、全体の雰囲気はあるけど、ほとんどそれを参考にしてはいない。子どもの見逃してってということもつながってくるように思います。去年くらいまでは、実際にちゃんと本園の教育課程を見たことはない。

今思うのは、自分の限界、自分がを思えると思ってたっていう感じ、つまり一人ひとりの子どもについて、今はこういう段階こういう時期でつきにはこういうふうになるうというようなことを思えると思っていました。しかし、いま全員に対してそうは思えないなという感じがしてきました。見逃していることがあるように思います。その意味では、教育課程を見た時に、あそうやっぱりそうかと確認できるとか、やっぱりそうかなと思ったりして、改めと教育課程を見ることはあるかなと思ったりします。ただ、今でも教育課程があるからそれに沿って保育をしているということについては、そうではないという感覚があります。

また、今作ってある附属幼稚園の教育課程をおおまかですね、2年間または3年間で作ってありますね。

ここでみられるように教師によって、教育課程のとらえ方がかなり異なっている。大切なことは、「この教育課程は、ごく当たり前のことしか書いてないし、何もいではないかと思いました。」といいながら、自分の限界、自分がを思えると思ってたっていう感じ、つまり一人ひとりの子どもについて、今はこういう段階こういう時期でつきにはこういうふうになるうというようなことを思えると思ってた。しかし、いま全員に対してそうは思えないなという感じがしてきた。見逃していることがあるように思います。その意味では、教育課程を見た時に、あそうやっぱりそうかと確認できるとか、やっぱりそうかなと思ったりして、改めて教育課程を見ることはあるかなと思ったりします。」というように、明らかに教育課程の必要性を認識するようになってきているということである。それぞれの幼稚園での経験が積み重ねられるにつれて、その意味が重要であることを認識することが、教育課程を改めて検討するために必要なことであるかもしれない。

同様の認識に変化は次のようなDやCが述べたことにもみられる。

D 園にはその園の文化とか目指す姿があるわけですから、そのような手続きでないとバラバラになってしまいます。どういう方向にいくかがわからなくなってしまうのではないのでしょうか。教育というものがある目標があって、それに向かっていくというならそれに沿ってやるというのが筋だと思えますし、その意味でそれに逆らうというのは基本的には職員としては間違っていると思います。ただ、この幼稚園の教育課程は緩い—それほど厳密ではないので、自分で工夫する余地もあるので救われているという状況です。ほんとうは、たとえば文部省とかいうのは文部省が望む子どもをつくらなければならないというふうに思うから、教育課程をちゃんとしろよということが強くなっているような感じ、感覚としてそういうふうな傾向が強くなってくるんではないかと思えます。

C この幼稚園に転動してきたときに非常に自由な感じがありました。この幼稚園の教育課程には書いてある通りにやらなければいけないっていうふうには書いてありませんし、そのように言われる人もありませんし、そんなにふうにしくはないといけないとか、このときには子どもたちをこう向けようと思ったことは全然ありません。一人ひとり子どもは違うから、全体的な流れとしてはこうかという流れを感じるのだけど、全体のクラスの流れとしては全体こうかなあということを感じます。一人ひとりの子どもが育っていく過程は違うと思うので、それを当てはめようとも思わないし、よりよく育っていくのにどうしたらいいのかなということについては日々考えて保育をしていくことが大切なのではないかなと思っています。教科書のような感じでは教育課程をとらえてはいません。

まさに、最後に述べられているように、「教科書のように教育課程をとらえることはしていない」ということは、幼稚園での教育を行う姿勢としてきわめて重要で基本的なことである。ややもすると、教育課程を金科玉条のように考えがちになりそうところで、このような意識をもつ教師の存在は心強い。

さらに、教育課程をどのようにとらえ、それをどのように利用するかなどの心構えなどについて、次のような内容が述べられた。

A 保育は、子どもと生活を楽しんで子どもがやろうとしてることを基本的には目指していくのですが、その目指す方向性が見えているのと（そうではないのでは違うのではないのでしょうか）、自己実現を支えていくということについてどのような生活経験を積み重ねていくためのおおまかな道筋を明らかにすることが必要だと思います。ただそれぞれの子どもが実際にはそれぞれの道筋をたどっていくことになります。こういう活動をしてほしいと思うものが指導計画だと思います。ただこれ（教育課程）はどういう道筋を踏まえて、2年間もしくは3年間生活をしながら過ごしていくべきものだろうかっていうものを示している、

道筋として示しているものだと思います。

1 それは保育のためのガイドのようなものですか。

A そうですね。ガイドの部分と、迷っていた場合に、どうすればいいのかなと思ったときにそれを確認し安心することのできるものと考えています。ケースによっては急いでいなくてもゆっくりゆっくりとたどっていく道筋もあるということ、いまこの時期は今の時期で見通しとしてこんなことがあるのでそれほど急がなくてもいいというところとえ方ができます。しかし、ガイドといったらそれにのせなくてはならないといったような意味でとらえられる危険性があります。そこまでいかなければならないというようなとらえ方をされてしまう恐れがあります。一足飛びに行ってはいけないのだと、戒めになったり、急いではいけないのだとかいうような判断の基準になります。そのために期も取り除いたのです。

1 今のことは非常に大事なことだと思うのですが、ガイドということになると我々はややもするとそれに合わせなければならぬというふうな考えでしまいがちで注意が必要ですね。

A こちらで考えているガイドは、この姿を見たときにこれがどういう方向に向かうかについて考えるときに、今の子どものつまづきや停滞について、それを克服するためにどのような援助をすればいいかを考えることができるようになります。

道筋がなければ、方向性も分からずどのように援助していけばいいかも見通しが立たないと思います。そのための道筋を示したものとして教育課程というものが存在しその必要性もあるのではないのでしょうか。

教育課程というのは、保育を縛るということではなく、子どもが生み出してゆくという状況は変わらないと思います。日々の生活を自分で考えを生み出していくということには変わらないと思います。そのところに先生と一緒にそういう状況を作り出していくときに、1つの状況を生み出すように先生が関わっていくときに、その教育課程があることですぐく教師のかかわりがやりやすくなると思います。

教育課程を編成するに当たっての基本的な姿勢やとらえ方の注意点などが述べられた。教育課程があることによって、日常に保育における援助がしやすくなる、援助の明確な根拠になるということが示されたといえる。

教育課程の編成するにあたって注意・考慮すべきことから

教育課程を編成するにあたって、必要な条件は本論の問題設定の箇所に述べてあるとおりであるが、実際にはどのようなものとしてとらえられていたのであろうか。そのことを示すことがらは次のような陳述に示されている。

1 今ある教育課程についてのとらえ方に、先生による違

いがあるのでしょうか。

A 教育課程を作っているところにかかわった先生は、自分のものになっているので教育課程を明確に意識していると思いますが、すでにできあがったところに来られた先生は、与えられただけだったらスーと流れてしまって、その言葉ひとつひとつも十分に理解する事が難しいこともあるだろうし、ぐっと自分の中に入っていきることについても、編成に関わった先生ほどでもないかもしれません。

実際に教育課程を作った時には、全部の年齢の子どもたちのいろいろな姿を出して、それをひとつの言葉で挙げて作りしましたので、その言葉にはいろいろな子どもの実際の姿があります。一見して、その事柄・言葉の背景にどのような姿があるかが読み取りにくいから、多分すーと素通りしてしまうんだらうなあと思います。だから教育課程は活用されにくいんだらうなあと思います。

1 極端な言い方をすれば、毎年作っていかねばいけなくてことになりませんか。

A そうですね。年度始めにもう1回きちんとそれを見て、毎年それこそ年間指導計画をきちんとチェックし、意識統一をしたり、ここはおかしいとか、これはどうということなどらうなどについて皆で共通理解する必要があると思います。本園においては年間指導計画の、見直しをする時間もないしそういう計画を立てていないところに問題がある。

1 次善の策として、4月に年間指導計画について、相互に話し合いをして理解を深めておくことが必要であるということですか。

A そうです。そうすると年度末にはこの教育課程をみんなでもうどうだったらうと、今年はどうだったよとか話をし、それを貯めておいて見直す必要があると思います。もちろん毎年ころころと教育課程を変えるということではありません。その蓄積を何年かたって検討して、やはり修正すべきところは修正する必要があるという検討の方向が必要なんではないのでしょうか。本来はそういうことをやっていかなければいけないですよ。余り大筋は変わらないと思いますけれども、表現とかを変える必要があるのではないかと思います。

実際にどこの園でもそういうことはなかなかできない、実際に研究を教育課程にあてたときでないと思直すことはできないように思います。

このように教育課程を編成するに当たっては、教師の現実の子どもの姿についての深い理解と、そのことを基にした教育に関する積極的な関わりの必要性・重要性が強調されるようである。また、教育課程の修正・変更については、できる限り行いたいという希望があり、そのことは教育課程編成に関わることによって一層の関与がなされ、そのことが幼児教育・保育・援助や指導にポジティブな影響を及ぼすことになると考えられる。さらに、その年その年で、保育の対象となる幼児が毎年変わることで、また、子どもや幼稚園を取り巻く様々な環境要因の変化を考えるとすれば、毎年あ

る時期、たとえば、新学期が始まる前に、教育課程を編成する作業、あるいは見直し、教育課程についての教師間の意思統一などの必要がある。

さらにインタビューは展開して、幼稚園の教育課程と小学校や中学校の教育課程との違いについても言及があった。そのような比較をすることによって、幼稚園の教育要領がどのようにあるべきか、特色は何か、違いは何かという点についても明らかにすることができると考えられる。

I 文部省の教育要領が変わり、それに伴って教育目標とか、指導の視点が変わっていくということになると、それに基づいて作られている教育課程は絶対的な根拠になり得るのかということにもなりますよね。教育課程はすぐれるものかなという思いもありますが。

D 本当は、教育課程は発達の道筋を描いているものではないと思います。発達の道筋を見るんだったら発達本を読めばいいから、やはり園とか文化的な背景があって作られたものであるからそれを意図している作っていくものであると思います。

A 地域の実情とか、各幼稚園の環境とか、背景とかそういうものが入ってくると思います。まったく園によって違うと思います。

D 英語教育とかいうことをやっている園は、カリキュラムの中にも入れているだろうと思いますが、本当のところはよくわかりません。それはおそらく指導計画と違うと思います。指導計画の中には内容的にも必要なものが盛り込まれると思います。よくわかりませんが小学校も内容というのはどのようなものですか。

I 小学校や中学校では、教科別になっています。そのときに何をするかきっちりと時期も決まっています。

D そのことと幼稚園の教育課程との間のギャップがあるように思います。基本的には教育課程ってのはそういうものだと思いますが、幼稚園に持ってきたときには境界がないし、一人ひとりの子どもというような持ち方で保育をするわけですから、ギャップもあるから幅のあるような書き方にもなったりするし、中途半端なものみたいなのらえ方がされる背景があるのではないかと思います。もしこうでなければならぬことがあったとすればそれからは逃れられないわけだし、先ほどのガイドと違ったものがあると思います。

このように、教育課程の編成に当たって、小学校の教育課程との対比をしながら考えていくことは、幼稚園教育の独自性の観点からも非常に大切なことであると考えられる。

教育課程やカリキュラムと呼ばれるものは指導計画とは意味が異なるものである。子どもの経験、子どもの発達段階、子どもの実際の姿を基礎として子ども自身が自ら育っていくということがすべての基本にある。

小川(1989)は、次のように述べている。「そもそもカリキュラムというのは、児童中心主義の伝統を引くもので、子どもの経験の流れが前提となっている。そして、この考えに基づけば、教育というのは自己教育であり、子ども自身が問題を解決していくものなんです。その前提に立って、カリキュラムというものは、子どもに成り代わって教師が望ましい経験を並べていくものであり、ですから常に子どもにとって仮説であるわけです。」(Pp.14-15)。まさに、本研究のインタビューからは、小川の指摘する本来の教育課程・カリキュラムのあり方が示唆されているようである。すなわち、教育課程の編成に当たっては、指導計画との関連、幼児の発達の姿、園の目標や遊びを中心とした保育の展開の予想、さらに、幼児の主体性を生かす教育課程のあり方などについて考慮することが意識されていることから、教育課程編成のきわめて基本的な要件を満たすことの重要性が示されているのである。

ところで、教育課程に関わって、ノーカリキュラム主張(平井,1989)もあるが、その本旨は「カリキュラムの多くが、子供不在であり、保育者が頭の中で作成したものであり、それに沿って課題を子供に押しつけることによって、子供の自発性に圧力を加え、その発達の停滞した子供の多発させている(中略)保育界や教育界には、依然としてタテ社会の意識が強く残っており、それが子どもたちの自発性に圧力を加えている。この点の反省が、保育界の緊急の課題である。まず、カリキュラムの是非について検討を始めてほしい」(p.7)ということである。このような警鐘は、教育課程や指導計画、月案、日案を編成するに当たって、留意しなければならないきわめて大切な事柄であるといえる。

引用文献

- 平井信義 1989 ノーカリキュラムの本旨 保育研究, 1989, 10, 1-7.
- 広島大学附属幼稚園 1996 幼児の自己実現を支える教育課程の編成 幼児教育研究紀要, 18, 1-74.
- 文部省 2000 幼稚園教育要領解説.
- 小川博久 1989 カリキュラムの現状と問題点 保育研究, 1989, 10, 8-24.
- 群馬大学附属幼稚園 2000 幼児期にふさわしい幼稚園生活の創造.
- 群馬大学附属幼稚園 平成12年度 2000 教育課程.
- 真亀幼稚園 1995 研究集録 生き生きと遊び共にのびる子どもの育成—教師の言葉かけを中心に—.

(文責 山崎 晃)